

2021 May

5月号

# 春燈



## 久保田万太郎の句

神輿まつまのどぜう汁すすりけ里

句碑建立 昭和四十一年

師の行きつけだった「駒形どぜう」にこの句碑がある。独特の書体の色紙が店の主に送られたそうだ。

祭り本番前の腹搾えのどじょう汁。晴れと曇の季語を見事に取り合わせることで、相乗効果をあげている。しかしこれはあくまで息をするように詠まれた一句であり、何の衒いもなくほろりとこぼれた甘の葉である。そこに素の師を垣間見る思いがする。

川崎真樹子

## 久保田万太郎の句

水狂言南北作とつたへけり

『藻花集』大正六年

万太郎師の本句は師が二十代後半の快作である。矢野誠一の『芝居歳時記』で見つけた。当時は冷房もなく水芝居は涼気を運ぶ恰好の娯楽であった。師はその涼気を意表を突いて上五に置き、夏芝居の王者鶴屋南北の作と明かしてより、本句は一気に浮かび出た。

南北芝居はその面白さが観客の評判を呼び後世へ勢いよく伝わった。若き万太郎師の歎ひの日々であったろう。

石田康明

安立公彦



半開の紅うつくしき佗助や

水仙を手折るをみなもの衿清に

大川を渡る夜汽車や二月尽

灯台を遠見に砂洲のさくら草

清明やひとつ墓石に父とはは

燈下集

○ 三代川玲子

織月をあげて春立つ雑木山

海見ゆる駅パンジーの花時計

早春の海見下ろして男神

遠を見る春のコートを着てマネキン

朧夜や川をへだつる街灯り

○ 豊谷青峰

春寒料峭山懐の翁の碑

亀石や飛鳥の里は春寒し

磯二月波風荒き船着場

料峭や警察犬の耳聡し

地獄耳政界騒ぐ春疾風

○ 高埜良子

恙なく歩く日課や木の芽風

寒明くる川崎宿の今むかし

渡し場の縁起を確と菜飯かな

水温む沼に降り立つ鳥の影

ひだまりの庭や飛び飛び雀の子



○ 井上正子

娘との弾む会話や雛の日

春の山スケッチになる構図かな

教会もコロナ感染受難節

不条理から抜け出すを得ず藪椿

ワクチンの注射漸く花ミモザ

○ 吉川 隆

寒鳥何かに鳴きぬミルクテイー  
星の名に愛しさ非ず春高樓  
メロディーを奏づる時計春眠し  
駅ピアノ弾ければ弾かん春の歌  
踏絵せる江戸の人らを主は許す

○ 本田 保

小寒や失せ物ひよんな処から  
初汽車や鉄橋もトンネルも抜け  
藪入や鳥打帽の丁稚どん  
初閨魔嘘ついて舌抜かるるや  
考へてゐるが動かぬ寒さかな

○ 瀬戸 峰子

今日もまた自肅要請春寒し  
日表に黄金眩しき福寿草  
むせび泣き媚を売る声恋の猫  
いぬばしり駈け抜けてゆく恋の猫  
山菜莢の花ぼつぼつと目につきぬ

○ 今井 弘雄

空青し陽の匂ひ抱く柳の芽  
高齢者外に出るなど春の空  
春の夜や家にこもりて独り酒  
春の夜やこけしくちづけ恋うてをり  
棧俵流れて雛泣きにけり

○ 清水 美子

産土の梅林しのびつつ歩む  
紅梅や路地の屋並に満つ香り  
春光のあまねく富士や旅心  
亀鳴くや力をくるる声と聞く  
下萌や窓の際まで攻め込み来

○ 片山 博介

多喜二忌や夜明けに襲ふ金縛り  
落つるより七彩放ち雪雫  
春一番鐘撞堂を唸らせて  
点々と水面にしづく鴨帰る  
春月の雫浴びけむ駿馬の背

○ 府川 昭子

日脚伸びるにのこる日の匂ひ  
縄文から令和への梅咲きにけり  
白梅はひかりの花となりけり  
沈丁や仏の父母と香を交はす  
一羽てふことのなかりし目白かな

○ 松山 三千江

鬼やらひ鬼にとどかぬ声出して  
解体のビルがらんどろ返る  
一つ咲き二つ散りたる玉椿  
ひとそと咲く葦に明日をもらひけり  
風光る女性指揮者の黒スーツ

○ 永島 雅子

プランターを青に染めたるいぬふぐり  
風船手に児は滑り台すべり下り  
帰る子を送る家路や春寒し  
夫を呼ぶ間なく鶯飛び立てり  
春日傘刺繡の花の満開に

○ 篠原 幸子

囀のひと日ひと日の勢ひかな  
梅の坂人も鳥語も行き交へり  
バスを待つ間の語らひや花なつな  
ものの芽や袖ふれ合ふも縁とよ  
落椿うつぶしといふ黙のあり

○ 矢口 笑子

ご意見は耳を素通り春の猫  
根つからの井勘定二月尽  
神宮の杜憚らず鳥の恋(明神宮ミュージアム三句)  
囀や常の御膳の鉢と皿  
御机の上の呼び鈴燕来る

○ 藤原 若菜

父偲ぶものに二月のチョコレート  
いぬふぐり夫とゆつくり歩きけり  
学舎へ続く並木の初音かな  
うぶすなに手合はすふたり梅二月  
公園の微睡む風車春の水

○ 大文字孝一

神宮の杜の鼓動や春兆す(明治神宮句)  
ものの芽のほぐるる気配神の杜  
重なれる吉事寿ぐ二月かな  
暖かや判子代りに押す拇印  
雛の衣のほつれも家の歴史かな

○ 和田絢子

見当たらずとも沈丁に紛れ無し  
立春や昭和二桁胸を張り  
春シヨール荷になるほどの日和かな  
春愁や語り掛くるも句碑の黙  
蜜柑山この地にもあり開拓史

○ 神田恵琳

青竹の切口匂ふ女正月  
農民の作れる田沼白鳥多々  
雨雲や白鳥帰るざわめきか  
草芳し大利根の空無傷なる  
春光跳ぶ兜屋根なり山の宿

○ 小山繁子

山畑に動く人影水温む  
春泥をよけて蛇行の三輪車  
待つといふときめきの日や桜草  
のどけしや漫る歩きの一万歩  
雉啼くやにはかに暮るる峡の里

○ 小島昭夫

マスク着け歯科技工士のアイシャドウ  
あの「イエナ」在りし銀座や寒の月  
梅が香や無人の家の暗き庭  
鶏鳴の力変活用春の朝  
夫と子に揺るがぬ愛や桃の花(大平さゆりさん)

○ 渡辺若菜

青空に溶くる日差しや草萌ゆる  
如月や貝が舌出す洗ひ桶  
冴返る遠きを想ふ埴輪の眼  
料峭や聖塔越ゆる摩天楼  
寺多き古き都の芽吹かな

○ 西岡啓子

ドボルザークの「新世界より」春ぎざす  
春めくや水音しかと鯉はねて  
春寒し開発といふ土地ひろげ  
水温む茶巾干さるる茶室裏  
永き日のたづねては海めざしけり

○ 懸林喜代次

鬼やらふ百鬼夜行を憤り  
この辺りかつて色街猫の恋  
古民家はかつて村長雛飾る  
春の風邪かてて加へて花粉症  
啓蟄やつかまり立ちの出来たる子

○ 中村紀美子

立春の竹林の穂に勢あり  
少し歩をのぼしてみたき二月かな  
はんなりと岸辺の茶店白魚膳  
さきがけて野に空の彩いぬふぐり  
春夕べ字の似た人の封書くる

○ 豊谷ゆき江

集合写真の教師福耳山笑ふ  
料峭や耳に残れる父の声  
耳痒き朝の目覚めや木の芽時  
あたたかや土を平して地鎮祭  
目測をあやまる川や猫柳

○ 浅木ノエ

冬かもめ心許して聞寄らず  
書店脇の小さき茶房日脚伸ぶ  
恙なきを伝へあふ句誌春近し  
しだれ梅句集のつなぐ縁かな  
水温む肩を寄せあふ長寿村

○ 後藤眞由美

冴返る闇を抜け来る猫の影  
あたたかや蕾見上ぐるソフト帽(永鬼花先生)  
風光る猫のからだに日の匂ひ  
黒々と生気みなぎる春の土  
チューリップの芽が出ましたとしたためり

# 余言 安立公彦

赤城嶺の裾を端折り春一番

片桐てい女

赤城山は前橋市北方の複式火山。標高一八二八メートル。榛名山、妙義山と共に上毛三山の一つ。南東麓に、国定忠治ゆかりの忠治温泉がある。

今、その名峰の山裾を端折り春一番が吹くという。気宇壮大な句である。作者は白寿である。私たちの春燈も発足九百号近くになるが、てい女さんはその最高齢である。この上ない喜びと言えよう。過日春燈勉強会の折遠望した赤城山の山容が眼裏に残っている。「春一番」も目出度い。

残る鴨に波ねんごろや和昭の忌

西川 保子

中島和昭さんの逝去は、平成二十二年二月二十四日。享年八十二。春燈入会は昭和二十二年。二月号にへ低頭す着ぶくれの身の席譲られ、へ片身めく枯野戻りしステッキはの句があり、三月号にはへ福寿草天つ日これを嘉しけりの句が出ている。後句の善さは、十一年過ぎた今も諸うば

は「幸せ」と詠みたい。椿は国字、日本で作られた漢字。椿の花は咲いている時も善いが、落椿にはまたそれなりの風情がある。それは作者の「しあはせ」に自ずと通う。

斑雪旅の一夜の湯もみ唄

久保 久子

「斑雪」は、まばらに降り積もった春の雪。同じような春の雪の「残雪」は、区分としては地理に属するが、斑雪は天文に分類される。

「湯もみ唄」と聞くと草津温泉を思い出す。温泉の湯を板でかき混ぜている景である。その「湯もみ唄」が善く一句をまとめている。「旅の一夜の湯もみ唄」には、ほのぼのとした安らぎの思いがある。更にその中七下五を誘う、「斑雪」が、安らぎに詩情を添えている。

恙なく歩く日課や木の芽風

高埜 良子

「恙なく歩く日課」。善い日課だ。散歩のことであり、言いで得ている。私も長い間、夕暮の散歩を文字通り日課としていたが、昨年のコロナ禍以来、何となく出不精になっていた。この句を見て、マスク着用で再開し始めている。

この句には表現の過不足が無い。上五中七は右に述べた通りだ。座五の「木の芽風」は、木の芽を吹き渡る春の風を指す。爽やかな思いが、句を見る人の胸に湧く。

かりである。八十二歳の逝去が惜しまれる。

掲出句。「和昭の忌」に、永年春燈の俳句の道を、共に研修された思いが感じられる。「残る鴨」も「波ねんごろ」も、和昭忌への思いを深める。惜しまれる先人だった。

故郷の闇やはらかし蜆汁

江草 礼

蜆汁は蜆を殻付きのまま煮た味噌汁。歳時記にもあるように、やや泥くさい味が一抹の風味となっている。

作者は今、久しぶりに故郷に帰り、朝食の蜆汁に昔を思い出しているのだ。「泥くさい」は、土くさい、やぼであるの意味だが、その泥くささこそ、都会の生活では望めない風味であろう。この句、「故郷の闇やはらかし」が善い。闇やはらかきは、故郷で過ごした日々への懐旧の思いであり、記憶の浄化である。「故郷」が活きている。

あるがままに生きてしあはせ落椿

中野さき江

「あるがままに生きてしあはせ」、人は誰しも或る年齢になると、ふと来し方を振り返り、こういう思いに更けることがある。そのとき、「しあはせ」の言葉が自ずと出て来る人は、健やかな家庭を持った人と言えよう。

「あるがまま」が善い。自然な表現である。「しあはせ」

青竹の切口匂ふ女正月

神田 恵琳

「女正月」、最近では余り聞き馴れない言葉だ。正月十五日を中心とする小正月を女正月と言う。また正月に多忙だった女性が、この辺りでひと息つく意味もある。

竹は草木の春・秋と異なり、春季は竹の秋である。しかし竹の切口の匂いは、正月十五日とて、その緻密な切り口には存在しよう。庭先の竹の茂みの中から、必要に迫られて一本の竹を伐る作者。手にする竹の香りに、ふと今日が女正月であることを思う。女性ならではの句と言えよう。

遠近に野焼の煙夕暮るる

永井 恵子

作者の住まいは宮崎県都城。日本列島は長い。春燈はその長い地域の、北は岩手県から、南は宮崎、鹿児島を経て更に国境を越え、台北の会員を擁している。それらの会員の皆さんが、月ごとの誌上で、それぞれの地域の四季の風物を詠み上げる。夫ぞれの土地の詩情を宿す作品である。

この句は早春の野焼きの景。「遠近に野焼の煙」は壯観だ。野焼きの先には連山があり、その先には雄大な高千穂峰が聳えているのだ。野焼きの煙は何時しか夕暮を誘う。日没の遅い都城も夕暮に入る。野焼きの煙は今まさに黄昏どきを迎えようとしている。抒情のひとつである。

# 当月集

安立 公彦選



○ 坂本依詠子

あの庭は紅この門は白梅見かな  
東西のふたりの客や雛祭  
来訪の戸口はなやぐ春シヨール  
干し物の逆上がりする春北風  
せんべい提げ町をぶらぶら桜東風

○ 秋山 葛

○ 佐藤まさ子  
活動の力湧き出づ二月尽  
春寒や改札口の人の波  
花種時く隣人親し垣根越し  
囀のまだ整はず空青し  
春の波耳そばだつる小さき貝

○ 土江比露  
日当たりて膝を折りたる大氷柱  
侘助や手になじみたる熊野筆  
桜木の根方に風や西行忌  
山笑ふ名前に酔へる酒饅頭  
湯の町の風の声きく柳の芽

○ 西谷恵美子

○ 土江比露  
百余年の風情を見ずる雛かな  
木の芽あへ手前味噌にて味はへり  
寒明けて鯉の背中の艶めけり  
池めぐる上着を腰に猫柳  
小流れの水音楽し春日和

○ 土江比露  
極月や波ちぎれとぶ日本海  
虎落笛わつと飛び立つ群れ鴉  
雪折れの音に眠れぬ一夜かな  
稜線に日のさしのぼる大旦  
好物も添へて子よりの寒見舞

# 春燈の句

安立 公彦選



東京 松本ゆきえ

店先に昭和の薫る雛かな  
家ごとに咲く梅・梅や屋敷まち  
萎ゆる足励まし歩く春浅き  
目薬に追ひ捲られて二月尽く

宮城 澤田 明子

広島 落久保万里

君の魂か明けやらぬ庭の白椿  
涅槃西風つれなく沁むる独居かな  
観てと言ふ君亡き今宵おぼる月  
思ひ出を夕餉の菜に日永かな

愛知 後藤 大

大阪 柿原よし子

利久忌や杓持つ男の子指白し  
春泥に跳ぬるや瞳輝かせ  
浅春の声聞こゆなり空也像  
うららかや日の斑の映ゆる築地塀

岐阜 高井 修一

神奈川 久津摩英子

梅が香や独りの刻の至福なる  
垣根越ゆひとかたまりの犬ぶぐり  
春雷の音さだかなる台所  
菜の花漬ひとりの膳の茶づけかな

茨城 関 道子

たんぼばや子供の好きな通ひ猫  
崖下につづく階段柳垂る  
出払うて漁港からつぼ春の昼  
春草や鳥の卵の在りどころ  
梅東風にたたら踏んだる山路かな  
梅林に入るを禁ずの不粋かな  
古城址や豆粒ほどの桜の芽  
ベランダに鳩睦み合ふ日永かな  
古草を踏んで力を確かむる  
古草の耐へゐる道や人の道  
草焼きの黒地や青のぼつぼつと  
嫁ぎたるむすめの雛老い知らず  
水戸学の弘道館や梅真白  
梅「月影」津波の松の鉢にかな  
椅子の肩ふるるばかりにしたら梅  
世界地図の疫増やしゆく余寒かな